

仏性の本義考

光 地 英 学

仏性の意義性格としては、仏であること、絶対清浄なものであること、大慈大悲であること、空性・無相・無我であることなどが挙げられうる。仏であることは仏の本質としての覚知を意味する。それは絶対清浄、慈悲を伴うものである。しかもかかる性格が一切衆生の上に妥当するやと問うた場合、現実是否定的である。蓋し煩惱に隠覆されているからである。寧ろ一切衆生の実体は煩惱性である。或いは煩惱と菩提との二性の混融されたものである。それではなぜ煩惱障があるか、かかる煩惱は何から出発されているものであるか、との間は真如と無明との問題ともなり、倫理的に性善説と性悪説の論攻ともなるであろう。この相反する二性格は公平に云った場合、その何れにも根源性を付与すべきではないように思われる。このようにみてきた場合、仏性は、それならば如何のように意義づけられたらよいであろうか。右のことを踏まえながら、しかも多少視角を変えて、仏性を具有しているとき

れるお互いの心に注目してみる。

われわれの心には平易にいつて第一の心と第二の心とが考えられる。第一の心とは普通、心理学や大脳生理学が問題にしているもので、常に自分という意識で思惟するところのものである。いわゆる分別智であり差別智である。第二の心とは自分という意識が入ってこない、時空を超越した真実なるものが働く、何者をも姿正しく無心に映し出す大いなる円鏡のような働きをなすものである、いわゆる無分別智であり平等智である。ここが生命の源泉であり、自己の根源である。第一の心は第七識までであり、第二の心は第八識もしくは第九識である。いうところの仏性とは、この第二の心に相当すると考えてよいであろうか。これは個人心の心の上に仏性なるものを探ったのであるが、視野を拡げ、視角を変えて考察してみたい。

唯物論と唯心論（観念論）は、世界の第一原理と歴史的発

展の究極の原動力を各物と心におくところにその特色がある。唯物論は古代ギリシヤの物話論・原子論に始まっているのは周知のことである。この唯物論を主体とした考えは、十七世紀にイギリスで機械的唯物論として出発した。十八世紀にはこの唯物主義の考えが、フランスにて生理学的唯物論となった。それが十九世紀になってドイツの唯物論哲学となって注目を集めた。この唯物論的思考は、ヨーロッパの産業革命或いは自然科学の発展に側面から推進力となり大いに貢献した。しかしそれは分子力利用の時代のことであって、現代の原子物理学の時代となつては、唯物論の根柢はくずれ去つたといつてよい。のみならずこのことは唯心論についても軌を一にしていいうる。唯物・唯心の一面のみを以て律することとは当を得ないことになった。唯物・唯心何れも存立の意義を失つた⁽¹⁾。何故であるか、このことを次に攻究してみたい。

物質を細分すると分子となり原子となる。地球の表面には水素からウラニウムまで九十二の原子の種類がある。かかる原子はさらに電子・陽子・中間子等の素粒子から成っている。各素粒子は何れも平等無差別で、フクラミ・チヂム特質を有し、宇宙に隙間なく充ち満ちている。素粒子は無数であっても、その量は一定で、不増不減・不生不滅である。素粒子は形相を絶し、物でもなく心でもなく、物心を超えたものであつて、万物を造る能力である。従つて素粒子はエネルギー

であるときれねばならない。この意味から素粒子はエネルギー素粒子とも称せられる。元来エネルギーは一八五三年、英国スコットランドのランキンによつて始めて用いられたものに取り入れられたものである。物質はエネルギーの集中固定したもので、その固定の相違つまりエネルギーの相違によつて現象の差別相がある。のみならず熱も光もエネルギーである。エネルギー粒子の集中程度の大なる方が温度高く熱い。これに対し集中程度の低い方が温度低く冷い。物の相の見えるのは光りによつてゐるが、光りもエネルギーの集中差による。五感による声香味触の感覚知覚も同様にエネルギーの分布不同、換言すれば集中差によつてゐる。振動もエネルギー放出の繰り返しによつてゐるとされる。生命も心もエネルギーを離れたものではなく、エネルギーのあらわれである。一切がエネルギーに包摂される⁽²⁾。

このようにエネルギーは万物を造る根源的能力であり、物心を造る力である。物も心もエネルギーをもととしてゐるから、この視点よりして物心は一如である。物心をあらわす力であるから、物心を超え、且つこれを包むものであるといいうる。有と無とを共に超え、これを包む、それは空といわれねばならないものである。一切皆空とは、エネルギーにより一切のものがあらわれているのであり、総てのものはエネルギーの発現したことの意味であると解せられる⁽³⁾。「中論」に

「空の義有るを以ての故に一切の法成ずることを得、若し空の義無ければ、一切は則ち成せず」といつているのも、かかる視角から理解されうる余地がある。真空より妙有、無一物中無尺蔵・一即多・色即是空等のことは、この点からも諒とされうる。かかる空（エネルギー）そのものは、特に取り出して示し得ないものであるから不可得であり不可得空といわねばならない。仏性とは空、つまりエネルギーを意味するものと理解してよいのであろうか。

仏性といってもそれは一般に有情、殊に人間の場合に用いるので、非常の場合は法性の語を用いることが多い。法性は諸法実相とし、悉くエネルギーの発現したものととっても、さして違和感を持ち得ない。要は仏性、つまり人間の上について仏性がエネルギーであるとして充分首肯されうるか否かが問題として残ることを、特に指摘したい。星雲が進化して太陽系となり、太陽系が進化して地球を生じ、地球が進化して生物を生じた。動物学は次のように教えている。二十億年前、単細胞生物であったが、五億五千年程前、魚類になり、次いで爬虫類になった。それが一億年程前、獣類になり、百万年程前、人類になったと。現在判明している限り、天体のうち、人類の如き高等なものの生息しているのは地球以外他にないといわれている。巧妙な仕組みの宇宙を小さくした小宇宙の観すら懐かざるを得ないのが人間である。まことに人

間こそ至高至尊、驚くべき存在である。人間という類性のうち、各個人は何れもみなそれぞれ異った多彩な個性を有している。自己というものは、他ではなくこのわたくしのみである。この自分がエネルギーによってできたものであり、本来具有の仏性もそれであるとして満足し安心できうるか、これが問題である。科学は知識の世界、没価値のものであるのに対し、宗教は信の世界、価値実現のものである。この意味にてエネルギーすなわち仏性であるということについて、いま直ちに結着を急ぎたくはない。

倫理的に或いは宗教的に仏性をみる場合、仏性は真実の人間性であり宗教性であり、人間の良心を掘り下げたところに内在する普遍性であり絶対的価値であると考えられる。すべての根源であるから絶対的価値たりうる。第八識九識が心の根源であり、宇宙的には一心である。それは清濁、煩惱菩提、善悪、すべてを超えている。超えているからこれら悉くを包越し止揚してるとなしうる。かの圭峯宗密は、「中華伝心地禪門師資承襲図」にて次の如く洪州宗の宗意を述べているが、その所説のうちこの間の消息と相通するもののあるのを看取しうる。「洪州宗の意は、心を起すも、念を動ずるも、指を弾するも、目を動かすも、所作も、作為も、皆是れ仏性の全体の用にして、更に別の用なし、全体の貪瞋癡も、善を造り悪を造るも、樂を受け苦を受くるも、此は皆是れ仏性な

りとす。」善悪等何れをも為しうる潜在的 가능성을秘めてい
るのが仏性であるから、いわゆる無性であり、無相であり、
無我である。これを仏性と考えるのが最も妥当であると思わ
れる。

かかる仏性説を唱道しているものに、浄土真宗の学者道振
がある。次に彼の主張する無自性仏性説を概観してみる。仏
性とは煩惱と仏性との二物があって、煩惱に対する一物とす
べきではない。仏性とは一切万法の性質不定を意味するもの
で、万法の外に仏性という別の存在があるのではない。万法
が縁を俟って種類変化してゆくのが仏性であって、仏性は無
自性空なものである。仏性が無自性であるから、仏縁に遭え
ば仏性となり、魔縁に遭えば魔性となる、縁次第で如何なる
ものにもなるのであるから、一の固定した性格として限定で
きない。「中論」に「因縁所生の法、我即ち是れを空と説く、
亦名づけて仮名と為す、即ち是れ中道の義なり」というのは、
このことをいう。いう如く一切万法の実性である無自性は、
衆生の妄情に遭えば迷界となり、仏の智慧に遭えば悟界へと
向う。煩惱となったり菩提となったりするのは仏性の無自性
空によるので、一の固定的の性格があるならば、煩惱を転じ
て菩提となし得ない。

以上が道振の無自性仏性説である。宇宙万物の根源が仏性
であり、その仏性は善悪・淨穢・菩提煩惱等の相対を絶した

ものである。しかもそれを以て清淨とし、慈悲とし、覚知と
するのは、修道的意図から出ているものと考えられる。前述
の如く縁に応じて如何ようにも変ずるのが仏性の性格である
から、清淨に、慈悲に、そして仏の智慧にと、学道者をして
仏性なるものを信知せしめ、その自覚のもとに修道に志向策
励するならば、仏性はそのようなものとして光りを発するの
理である。ここに仏教にて仏性の如上のような性格づけのあ
るゆえんが胚胎しているものと考えるのは、果して失当であ
ろうか。

- (1) 唯物論・唯心論の名称は妥当でないともされる。しかし
今は通塗の名称を依用しておく。なお「広辞苑」、松本徳
明稿（昭和四七年四月十三日「中外日報」所載）参照。
- (2) 山本洋一博士は素粒子を以てエネルギーとし、（根本道
理と宇宙・物象・社会）二・三・二八・三一・三二・三三
九各頁等）武藤義一博士は電子を以てエネルギーとなして
いる。（昭和仏教全集第二部11「科学と仏教」五四頁）な
お山本洋一「科学と仏教」（仏教文庫13）七六頁。等参照。
- (3) 山本洋一「根本道理と宇宙・物象・社会」六七頁。
- (4) 岡潔集第二卷二九四頁、同集第四卷三三三頁。
- (5) 増永靈鳳「禅とは何ぞや」（駒沢大学教化研究所編「禅
と念仏」所収）八六頁。
- (6) 真宗仏性辨講述。普賢大円「真宗概論」三二頁〜三三
頁。